

感情を解く：心と脳、身体が織りなす相互作用の科学

寺澤悠理

文学部心理学専攻 教授

感情神経科学研究室は2020年に誕生しました。心・脳・身体の総体として感情が生まれる仕組みを、科学的にひもとくことを目指しています。

感情はどのように生じるのでしょうか。うれしい、悲しい、腹立たしいといった感覚は、他者との交流や過去の回想、さらには空想の中でも生じ、常に私たちの心を揺さぶります。この根源的な疑問に対し、私たちの研究室では「心と脳、そして身体の働きの相互作用」という視点からアプローチしています。心理学や感情神経科学の知見を基に、目に見えない「心」の働きを、客観的かつ多角的な手法でひもとくことに挑んでいます。

強い感情を抱いたとき、私たちは鼓動の高鳴りや呼吸の変化、指先の冷たさを経験します。直観的には心が身体に影響を与えていると考えがちですが、心理学には「身体の反応が感情の変化を引き起こす」という逆説的な古典理論も存在し、長年議論されてきました。私たちは、この心身の密接な関係を解き明かす鍵として「内受容感覚（身体内部の状態を感じる感覚）」に注目し、この感覚の個人差が感情認識や制御と

どのように関わるのかを詳細に調べることで、感情が生まれるメカニズムの理解に近づこうとしています。

卒業研究ではそれぞれが広く感情に関わる研究テーマを追究しています。研究テーマは非常に幅広く、表情や感情の認識、感情制御、意思決定や判断といった基礎的なテーマから、音楽が生むノスタルジアなど、学生各自の関心に寄り添った多彩な探究が繰り返されています。行動実験だけでなく、心拍や発汗といった生理指標、あるいは脳機能の測定を組み合わせ、研究に邁進しています。

研究の醍醐味は、日常の現象が「なぜ起きるのか」を解き明かす瞬間にあります。予想通りの結果も、意外な発見も、全てが新たな知見となり社会へと還元されます。心や行動に深い関心を持つ学生の皆さんと、驚きに満ちた発見の喜びを共有し、共に感情の未知なる領域を切り拓いていきたいと考えています。

感情を軸に学びを広げる

富尾 藍君 田村唯花君 文学部心理学専攻4年（執筆当時）

私たちの研究会では、主に感情について、心と身体の両側面から心理学的に研究しています。各自が関心を持つテーマについて文献を読み、議論を重ねながら理解を深めるとともに、他のゼミ生が関心を持つ研究分野にも触れることで、自身の興味や知識を広げていきます。また、卒業論文の執筆に向けた準備として、先行研究を模倣した実験を行い、実験プログラムの作成やデータ分析などを通じて、研究を主体的に進めるための基礎的な力を養います。文献講読から実験・分析までの一連の過程を通じて、各自の関心を大切にしながら、心理学研究を実践的に学ぶ研究会です。



大きな模型による未知なる現代建築の探究

なか
がわ
中川 エリカ

環境情報学部 専任講師

15名ほどの学生が日々大きな模型を制作しながら、フィールドワークの成果として世界を立体的に記述したり、未知なる現代建築・設計方法論について模索しています。

私は一級建築士資格を持つ建築家として建築設計事務所を経営しながら、SFCで教鞭を執っています。まず自分自身が建築設計の実践の最前線に立つことによって、そこしか得られない経験を学生に生の声として伝え、現代建築が最も取り組むべき課題とは何かを日々議論し、探究しています。

建築設計はクライアントからの依頼があつて初めて成り立つ仕事であり、また、施工者がいなければ建築をつくることはできません。建築設計のプロセスにおいては数々の法的な手続きもあります。その上で、美しい・心地よいとはどういうことかという、人間としての感性も問われます。その意味で、建築は、とても社会的かつ複合的な創造活動であり、SFCという環境で、分野横断そのものである建築を教え、探究することはとても刺激的です。

大震災やコロナ禍を経て、私たちは近代建築が当たり前としてきた数々の問題に直面しました。つまり今は、近代建築を乗り越え、未知なる現代建築に

向かう絶好のチャンスです。私の研究会では、かつて建築家バーナード・ルドフスキーが地域に根ざした市井の魅力的な建築を「建築家なしの建築」と呼び、近代建築を批評したことを下敷きにしたが、未知の現代建築へ向かうための設計手法を探究しています。

その際、大きな模型を活用しています。大きな模型は直感的な理解を誘発する方法で、教える・教わるという境界を超え、多角的な議論をする上でも有効です。例えば、写真やテキストなど2次元で記録することが多かったフィールドワークも、大きな模型によつて記述すると、これまでとは異なる具体性を持ち、より高い解像度で市井の営みを考察することができます。また、従来の原理原則を乗り越えた構造形式を持つ現代建築を設計する際には、重力と共存する大きな模型が、力学的に成立するか否か明確に示します。学生たちの制作する大きな模型が、まさに現代建築の探究における半学半教の実践となっています。

模型を囲み、思考を形にする

ます だしょう たろう

榎田 将太郎 環境情報学部 4年

中川エリカ研究会では、皆で大きな模型を囲み、それをのぞき込みながら議論を重ね、新しい建築の発明・発見を目指しています。模型作りにはチームワークが欠かせず、日々、皆で表現スキルの向上に励みながら、作り方や手を動かす中で生まれる気づきを共有し、思考を深めています。さらに、模型での検討を踏まえ、実際に「作る」ことも大切にしています。2025年度から取り組んでいる静岡県伊東市八幡野でのプロジェクトでは、学生自らが野外什器の設計から自主施工までを行い、模型から1:1へと立ち上がる過程と、完成後の効果を体験することを通して、実践的に学んでいます。

